



“鷹柱”

長岡市 長谷川 誠

7,8年前の9月のある日、仕事で山本山にいた。10時頃、あまりに天気がいいので外に出てみる。ふと見上げた空に“鷹柱”。あ然としてしばし見とれた。

その前年の10月初、仕事で三重県に行った。休日鷹の渡りで有名な伊良湖を是非見たいと思い、鳥羽からフェリーに乗る。鳥道具もなく伊良湖の何処へ行けば見られるのか解らない。ぶっつけだが幸いにも港近くの建物で鷹の渡りの展示があり見学することができた。レンタサイクルを借りていざ出発…………。

いるわ いるわ！超望遠レンズ、スコープの列、～野鳥研究会、～野鳥の会と貼ってある県外ナンバーのバス、四駆、ひと目でウォッチャーと解る人、人、人、…………

この日太陽は出ていたが、風が強く、時間的にも昼頃だったので、山沿いに時おり数羽飛ぶ姿は見られたが、海へ飛び出す姿はもちろん“鷹柱”も見られず悔しい思いをした。

ふたたび山本山山頂。次の日曜日、快晴、ラッキー！期待に胸ふくらませて待つ。8:30きた……。金倉山方面から浮かんだ点が徐々に大きくなり、上空を通過していった。この日、午前中だけで100羽を越えるサシバやハチクマが見られ、鷹柱も何回かみられた。

その頃、県内では牧峠での観察が知られ初め、末崎朗氏が柏崎の小村峠で観察を始めていた。さっそく末崎氏に連絡をとった訳だが、その後山本山は県内で鷹の渡りの最も見られる場所として、毎年探鳥会が行われている。

また県内の渡りのルートの解明は、末崎氏らによりたびたび本誌でも紹介され、皆さん承知の事である。

上昇気流にいつのまにかできる“鷹柱”。そこをめぐって徐々に数を増し、また一羽一羽渡りに入っていく。私はというと、そんな“鷹柱”を求めて、あの年から、南は松代町から北は下田村まで、あちこちに出没している。



小鳥店調査の報告

保護部

調査の意義と経過

愛玩用として販売されている小鳥類は、カナリヤやブンチョウなど外国産の鳥の他に、日本産の小鳥類も多く売られていることは周知の通りである。それらは業者団体の発行する輸入証明書をつけて、近隣諸国（主に中国と台湾）や越冬地の東南アジア諸国から輸入したものとされている。この証明書も後述するように眉つばものもあり、それが無くても販売されており、これらは密猟（不法捕獲）につながっている。野鳥の密猟はカスミ網による大がかりなもの（冬鳥を目当てに焼鳥用とされる）の他に、小規模なカスミ網やトリモチその他によって捕獲されたものは、小鳥店などに流れて愛玩用に販売される。国内のペット需要と相俟って密猟は後を絶たない状況にある。

それにしても、県内にどの位小鳥店があり、どのような鳥がどれ位の価格で販売されているのか、これまで調べられて公表されたものはない。まずはその実体を把握する必要があるというわけで、この調査を実施した。

小鳥店調査については、当支部も1995（平7）年度より団体加入している全国野鳥密猟対策連絡会（事務局：京都市）から、早くから協力要請があった。1995年に保護部の役員だけで、予備的に近くの小鳥店やペットショップを回ってみたところ、予想外に日本産でもある様々の野鳥が販売されていた。そこで、その数年前に実施した支部会員全員のアンケートの中で、「保護活動に参加したいと思う」という会員が80名余りいたことから、そうした会員に期待して、1996（平8）年と'97（平9）年に支部会員全員に呼びかけて（調査用紙も同封して）、任意参加で調べてみた。しかし、報告のあったのはわずか1～2名に過ぎなかった。この中には津川町の山賀氏のように、町

には小鳥店はないが、野鳥飼育の状況やカスミ網による密猟発見など、資料を添えた貴重な報告もあった。しかし全体としては、どうにもならなかったので、'99（平11）年の役員会に諮って、保護部を主とした役員の一部と会員の一部にお願いして、実施することにした。調査に参加協力いただいた方々は、末尾に掲げたが、その労に深く感謝するものである。

なお、ここでは保護部員による'95年の調査および会員の任意参加による'96、'97年の調査をあわせて報告する。

調査の方法

最近小鳥店は少なくなり、町や村には殆ど存在しなくなった。市にも無いところがあったり、大型ホームセンターのペットショップなどで扱う所が増えてきた。また、春秋の季節だけ国産種を含む小鳥類を扱う店があったり、そういう鳥を店先に出しておかない店もあるとか、こういう所は密猟鳥を売買しているものと思われるが、実態は掴めない。

ともかく今回は市単位で調査担当者を決めて、4月～5月に調査することにした。調査の依頼者には、趣旨を書いたお願いの文書と調査用紙を送り、都合でできない場合は連絡いただき、代わりの方をお願いすることにした。しかし、連絡も報告もいただけなかった方や、また店の人とは顔見知りであったりして、人情的にそうした調査はできないと断ってきた方もあった。

調査の結果

報告された記載をもとに各市にあるホームセンター等のペットショップを含む小鳥店のうち、日本産鳥類を含む小鳥類を扱っている店の数と販売種を表1に示す。

表1. 日本産鳥類を含む小鳥類を扱っている県内の小鳥店の数と鳥種

市名	店の数	販売されている日本産鳥類を含む小鳥類
村上市	1	(店はあるが調査できない)
新発田市	1	ヒガラ・ヤマガラ・メジロ・ミヤマホオジロ
豊栄市	なし	—
新潟市	5	ヒレンジャク・コマドリ・ウグイス・キビタキ・オオルリ・ヒガラ・ヤマガラ・メジロ・ホオジロ・アオジ? (クロツグミ・キビタキ・コガラ・シジュウカラ・ミヤマホオジロ・マヒワ・ウソ・コイカル)
新津市	1	コマドリ・オオルリ・ユキホオジロ
五泉市	なし	—
白根市	なし	—
加茂市		
燕市		
三条市		
見附市	なし	—
栃尾市	なし	—
長岡市	1+	コマドリ・ウグイス・オオルリ・ヤマガラ・メジロ・マヒワ・オオマシコ(9月の調査、売価など不明)
小千谷市		
十日町市		オオルリ・ヤマガラ・メジロ(小鳥店・ペットショップはないが、ホームセンターで月1回ペットフェアあり)
柏崎市	2	キビタキ・オオルリ・ヒガラ・ヤマガラ・ゴジュウカラ・ホオジロ・マヒワ・ベニヒワ(売価などの調査はできない)
上越市	1	ジョウビタキ・オオルリ・コガラ・ヒガラ・ヤマガラ・ヒメメジロ・ホオジロ(ミヤマホオジロ・カラヒワ・イカル・コイカル)
新井市	なし	—
糸魚川市		
両津市	なし	(日本産野鳥を扱っている店なし)

(注) ①店の数はホームセンター等のペットショップを含む。日本産小鳥類を扱っていない店は除いた。空欄の市は報告のなかったもの。

②新潟市と上越市の()内鳥類は、新潟市は'95(平7)年6月の調査、上越市は、'96(平8)年4月の調査で、今回の販売種の他に販売されていたもの。

報告のなかった市があり、県内全体の店の数は把握できないが、市単位でも小鳥店やペットショップなど無い所もあり、日本産の野鳥を扱っていない店もある。販売種ではウグイスは例外として、声や姿や愛らしさなどから、ヒタキ科・シジュウカラ科・アトリ科の鳥が多い。飼いやすいのも条件であろうか。メジロはどこでも扱っているもっとも多い販売種であるが、最近ペットショップなどでは台湾・中国に生息する亜種ヒメメジロも入っている。それだけ日本産の亜種メジロと識別しやすくなった。

販売数量などは把握できないが、店頭においてあるのは、メジロが比較的多く、ヒメメジロを20羽という所もあった。ヒガラの14羽もあったが、他は1~数羽であった。まだ他に

店の奥の見えない所に多く置いてあることも推測される。

次に販売価格については、表2に示した。地域や店による差もあるようだが、同じ店でも鳴き声の善し悪しや若鳥と成鳥などで、大きく差がついている。注目されるのは、新潟市の店で尾身氏が聞き取ったように、輸入証明書があれば高価になるようである。つまり、輸入証明書がないのは密猟ルートからの入手を示唆するとともに、輸入証明書が免罪符のように扱われているととれよう。

ともあれ、このような売価のもとに、ペットとして結構買われてゆくりしい。

「輸入証明書」について

輸入証明書は日本鳥獣商組合連合会が発行

表2. 日本産鳥類を含む小鳥類の販売価格

ヒレンジャク…輸入証明書なくて7,800円、あれば13,000円（新潟）
コマドリ…17,000円・10,600円（新津）、10,000～12,000円（新潟）
コルリ…13,000円（新潟）
ジョウビタキ…7,980円（上越）
クロツグミ…20,000円（新潟'97年）
ウグイス…18,000円（新潟）、20,000円・15,000円・9,000円・4,500円（新潟'95年）
キビタキ…17,000円（新潟'95年）、13,000円（新潟）
オオルリ…20,000円（新潟）17,800円（上越）15,000円（新潟'95年）、13,000円（新津・十日町）、12,000円・11,000円・10,000円（新潟）
コガラ…4,980円（上越）、7,000円・5,000円（新潟'95年）
ヒガラ…8,000円・5,000円（新潟）、7,000円・5,500円（新潟'95年）、5,980円（上越）、3,800円（新発田）
ヤマガラ…15,000円（新潟'95年）、13,800円（上越）、13,000円（十日町）、7,800円・5,800円・5,000円（新潟）、5,000円（三条）、3,800円（新発田）
メジロ（亜種メジロ含む）…5,000円・4,000円（新潟、'95年も）、3,800円（新発田・新潟）、2,800円（新潟・十日町）、2,000円（新潟、'95年も）、1,980円（ヒメメジロ、上越）
ホオジロ…8,000円（新潟）、4,980円（上越）、4,500円（新潟'95年）、3,980円（上越'96年）
ミヤマホオジロ…4,580円（上越）
カワラヒワ…2,980円（上越'96年）
マヒワ…4,000円・2,500円（新潟'95年）
ウソ…8,500円（新潟'95年）
イカル…7,980円（上越'96年）
コイカル…5,980円（上越'96年）
ウズラ…♂480円・♀540円（上越'96年）
他にゴジュウカラ（柏崎）・ユキホオジロ（新津）など、売価の調べられなかったものもある。

(注) ①特に調査年の記載してないものは今回（'99年）の調査。

②ヤマガラで新潟の5,800円は輸入証明書のないもの、あれば7,800円。同様にメジロで新潟の2,800円は輸入証明書のないもの、あれば3,800円

する「鳥獣輸入証明書」と、日本鳥獣保護協会が発行する「輸入鳥獣証明書」がある。どちらも民間団体で発行しているので、法的効力はないが、まともであれば輸入鳥かどうかを判断する“証拠”になるはずである。ところが業者は、いろいろそれを悪用している。有効期間は1年だが更新申請すれば何年も使えるところから、死んだ鳥を更新して密猟鳥に添付したり、悪質なのは中国から輸入したメジロ（亜種ヒメメジロ）の輸入証明書をとり、鳴声の悪いヒメメジロは放し、密猟した鳴声のよい国内産メジロに添付したり、更に偽造物までであるという。毎年約10万羽が輸入され、それに伴う輸入証明書も相当な数で、密猟鳥に悪用されている証明書の枚数もかなりのもの

のと推測される。

店に入っても、売られている鳥の籠に証明書はなく（盗難を恐れてか）、聞くと大抵買えば添付しますと言う。新潟の店でこれも尾身氏が聞き出したところでは、輸入物はやせてすぐ死んでしまうので、全部国産の鳥でいろいろな人から入手していると言い、密猟者からの入手もおわせている。また末崎氏が9月に長岡のペットショップで聞いたら、「今は店に置く鳥は少ないが、春・秋の渡りのシーズンには多くなる、注文に応じて店にいない鳥も揃えられる、関東方面から来る鳥が多い」とのこと。これも密猟を疑わせるものである。そうした鳥にも輸入証明書が添付されて販売されている可能性は十分ある。

全国野鳥密猟対策連絡会は早くからこの輸入証明書の不備を指摘し、すべての輸入鳥に足輪をつけて登録すると共に、輸入鳥の取扱いの抜本的な制度改革を主張し、要望する運動を展開している。

おわりに

20年以上もフィールドで鳥を観察している人の間で、以前からみると全般的に野鳥が少なくなったと言われている。それは勘によるもので、確かなデータによるものではないにしても、そう外れてはいないであろう。野鳥減少の原因はつまるところ人間の様々な所業の複合的作用によるものである。その中に捕獲（乱獲）も含まれる。密猟は実態が掴めな^{つか}いが、かすみ網による大がかりのものも含めると、少なくとも毎年10万羽以上になるのではあるまいか。

かつて密猟や不法飼育に対する監視や取締に関して、行政や警察の腰は重かった。最近はある程度乗り出して来ている所もある。筆者も昨年、近くの二つの警察署から、野鳥の密猟と不法飼育を摘発したから、種の同定（種類の識別）をして欲しいと頼まれた。ヒガラ・ヤマガラ・シジュウカラ・ホオジロ・アトリなどだった。警察も情報があれば動くようである。

密猟などを絶やしたい、小鳥を焼き鳥用として味わったり、ペットとして野鳥を楽しむような風潮はなくしたい、野鳥は野で見るのが一番と、野鳥愛好者なら誰しも思うところであろう。そうした願望をたとえ小さくとも行動に現して行きたいものである。（担当：山本 明）

[調査依頼参加者] (順不同)

尾身秀雄('95年)山賀哲夫('96年任意参加)
久保田千華子('97年任意参加)・伊藤達司
藤田英忠・渡辺範雄・熊倉了一・伊藤定一
大林正人・土屋美幸・山谷正喜・箕輪喜一
末崎 朗・湯沢一之・小林成光・近藤健一郎
山本 明('96年)

(近藤氏は佐渡支部会員であるが、今回は特に両津市を調査いただいた)

密猟に関する情報提供のお願い

目撃したもの、または確からしい聞き込み情報でもよろしいです。年月日・場所・状況など分かりましたら、それらを記載してください。

これまで県内で数件の報告がありますので、後程まとめて事例として、この支部報に載せたいと思います。(保護部)

[送り先] 〒943-0836

上越市東城町3-5-51 山本 明

(FAX 0255-24-6881)

喰っぱらいのさえずり

柏崎市 小林 成光

近所の数家族と、毎秋恒例のサンマパーティなるものを隣の公園で催した。酒の肴は七輪で焼いたサンマが主役。あとは持ち寄りのツマミや酒だ。

今秋に仕込んだアニング酒（ウワミズザクラ）と、ワインレッドのナツハゼ酒をご披露したら、そのナツハゼ酒がやたら母ちゃん達に人気で、結局時間延長アハハ、オホホと夜中までさえずり合ってしまった。

鏡を見つめ悩んでいる妹に、兄が勇気づけようと「おまえ、人間は顔じゃないよ」と言うところを「おまえ、人間の顔じゃないよ」と言うTV番組での話から始まって、似て非なるものや言葉で盛り上がった。

「おい、死んだか？まだ生きてるねっか！早ヨ殺せバカヤロウ」。ぶっそんな話だがこれは電気屋さんの業界用語だ。そういえば昔、娘の作文で「たんちょう会（探鳥会）に行ってきました」を「たんじょう会（誕生会）」に直されて×になっていた事もあった。

カムチャツカ夏の鳥散見

上越市 山本 明

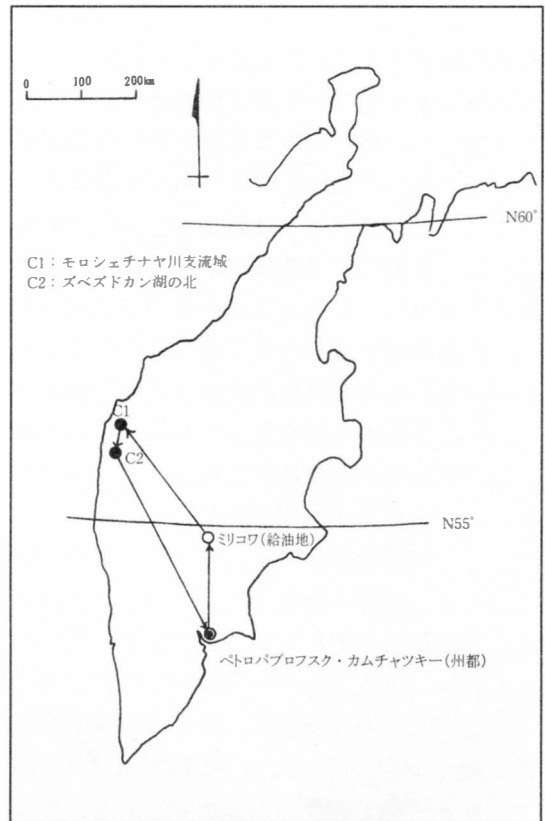
ヒシクイの亜種オオヒシクイは主に日本海側の新潟・石川・福井・滋賀の各県に渡って越冬する雁であるが、その繁殖地が何処なのかは、長い間不明であった。今年の2月、豊栄市が財山階鳥類研究所に委託して、福島潟で越冬したオオヒシクイ12羽に発信機をつけて放したうち2羽がカムチャツカ半島に到達したのが確認された。豊栄市はそれを手がかりに、更に調査団（団長：山階鳥類研究所標識研究室長尾崎清明氏）を派遣し、見事ヒナ連れの1家族を発見し、繁殖を確認したことは周知の通りである。

豊栄市がオオヒシクイに積極的に関わるのは、市域の福島潟を中心とする周辺水田が、わが国最大のオオヒシクイの越冬地であり、オオヒシクイを「市の鳥」に定めているからである。一昨年（1997年）には、同市の女性から成る民間団体「雁わたる会」が募金によって資金を集め、オオヒシクイの繁殖地探しのために、「カムチャツカ半島オオヒシクイ調査団」（サポート役の女性5名を含む11名）を派遣している。その資金に同市も一部出資した。

私は朝日池関係の日本海側オオヒシクイネットワークの一員として、この調査団に参加した。この時の調査ではオオヒシクイの繁殖地は確かめられなかったが、かの地で調査の合間に見た鳥について記すことにする。

調査地への行程

カムチャツカには6月29日～7月3日まで滞在したが、調査地に入ったのは6月30日～7月2日の2泊3日に過ぎなかった。調査地は図に示すように、中部西海岸近くの2カ所で、これは現地の鳥学者ゲラシモフ博士の選んだ候補地であった。博士は雁の権威者で、「日本雁を保護する会」などと協同調査も行い、これまで何回も来日しており、その都度本県も訪れてい



ることはご承知の通りである。

州都ペトロパブロフスクカムチャツキーの街はずれに宿舎があったが、着いたのは夕方だった。翌朝は霧がかかっており、近くに樹林もなく、鳥はあまりいなかった。ユリカメメが飛んでいる他はハシボソガラスくらい。郊外のヘリポート周辺でメボソムシクイ・カワラヒワ（亜種オオカワラヒワ）・スズメなどがいた。

調査地へは大型ヘリコプターをチャーターし、私たち調査団の他に乗務員・調理員・通訳・ゲラシモフ夫妻など総勢20人。給油地のミリコワまで集落や人家は見当たらず、森林や湿地帯または草原だった。ミリコワは牧場のようで、やっと人家を見ることができた。ここでカササギとケアシノスリの飛翔を見た。

ミリコワから再び北を目指して飛んだが、

雲が低いため脊梁山脈を越えるために、高度2,000m以上で飛行した。雲上に聳^{そび}える高山と、やがて雲が切れた下界の眺めは見事だった。



①脊梁山脈にそびえる高山（ヘリコプターから）

第1の調査地

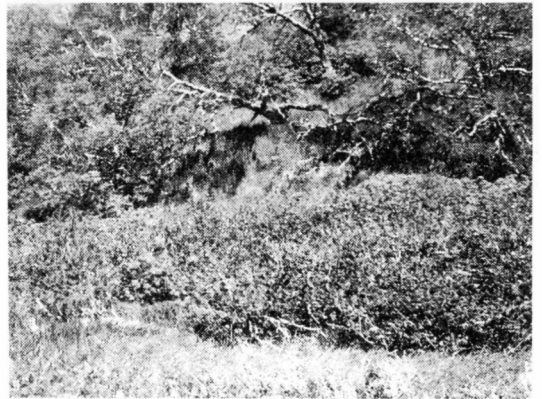
第1の調査地（図のC1）はモロシエチナヤ川の支流で、ここでゲラシモフさんが持ってきたエンジン付ゴムボートで、川を上下してオオヒシクイを探索した。

河畔には中木状のヤナギやハンノキの類が点在しており、そこでマミジロツメナガセキレイがあちこちにいて盛んに囀っていた（写真②）。餌を運んでいたのも見たが、巣は見つけられなかった。広い草原の河畔近くにハイマツが帯状に生えていて、その下にクロガモの巣があり抱卵中だった。川の水面に小型の雁と思われるほどの大型カモの雌がいて、飛び立った。後で調べるとオオケワタガモの雌かと思われた。



②川べりの木にとまって囀る
マミジロツメナガセキレイ

この付近には、乾性草原で背丈の低い草本や矮小木本からなる植生と、湿性の草原で背丈の高い草本からなる植生がある。しかし、これらの草原には意外に鳥は少なかった。川筋から少し離れて高さ20~30m程の河岸段丘らしい地形があり、その斜面には大きなシラカバの木が疎林状にあるほか、ナナカマドなど低木も生えていた（写真③）。段丘状の上は他の中低木が密生していた。夏至も過ぎていたが、日本時間で2時頃には明るくなり、早朝から濃い霧の中でムジセッカがチュビ、チュビ、チュビ、チュビ……と忙しく囀っていた。この鳥はその年の5月に東頸城郡牧村に現れ、鳴声を聞いたが姿を見ることができなかった。何とか姿を見ようと懸命に探し、漸く見ることができた。



③段丘状斜面のシラカバ疎林

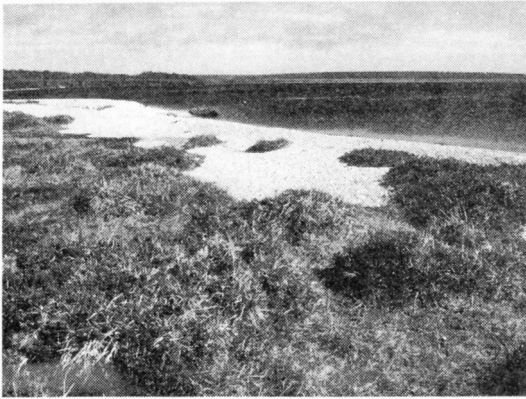
この樹林地帯にはツツドリ・メボソムシクイ・カシラダカ・オオカワラヒワ・アトリなど日本の夏鳥や冬鳥もいた。聞いたことのないいい声で囀るのがいるので、何だろうと探したらギンザンマシコだった。私にとって初めての出会いで、青葉の中の雄の赤い羽色は印象的だった。

その他ここで見られた鳥はコガモ・キンクロハジロ・スズガモ・ホオジロガモなどのカモ類、ワシタカではオオワシとケアシノスリ、カモメ類ではオオセグロカモメとクロトウゾクカモメ、それにワタリガラスも見られた。また早朝ボートでオオヒシクイ探しに行った時、ヌマライチョウらしい雄に出会った。草

むらから首を持ち上げて暫く^{しばら}辺りを見ていたが、そのうちバタバタと飛び立っていった。

第2の調査地で

第1の調査地ではオオヒシクイが生息している様子がないと分かったので、2日目に少し南のズベズドカン湖の方へ行くことになった。ズベズドカン湖の上空を通った時、換羽中の飛べないオオヒシクイが固まって大きな群となって湖面上にいるのが見えた。湖面が一番安全なのであろう。



④第2の調査地の湖のほとり
白い礫の浜に続く草原

第2の調査地はズベズドカン湖の北にある無名の湖で、その岸近くへ着陸してテントを張った(図のC2)。オオヒシクイも小群で飛んでいるのが見られた。この湖もかなり大きく(鳥屋野潟の5~6倍以上)、波打ち際に白い礫のある所があり、そこから草原(日本の高層湿原の陸化が進んだ状態のもの)が続き、所々にハイマツが生えていた(写真④)。この白い礫の小片をヒシクイは砂のうに取り入れて消化に役立てるといわれている。このあたりはオオヒシクイの換羽地であちこちに風切羽をはじめ体部の羽毛が多く落ちていた。ここでオオヒシクイは換羽をしてはるばる渡ってくるかと、一入^{ひとしお}の感があった。

草原に続いてハイマツが多く生えて、湖の回りを带状に取り巻いている。そのハイマツ帯の縁^{へり}の辺りで、ツメナガホオジロがよく見える枝先にとまって囀っていた(写真⑤)。ここにもマミジロツメナガセキレイがいて、草

原の中で親鳥が給餌している巣立ち間もないヒナ1羽を見つけた。草原には他に捕食者にやられた中形シギと思われる卵4個が転がっていた。時期が遅かったのか、シギ類は見当たらなかったが、繁殖していることは確かなようである。

この湖でもボートによってオオヒシクイの親子でもないかと探索したが、発見できなかった。湖の中ほどに浮島が発達していて、そこにはオオセグロカモメのコロニーがあり、巣には卵やふ化したヒナが育っていた。ここでもオオヒシクイが換羽したとみえ、羽毛が多く落ちていた。

ここではその他にオオハム・クロガモ・クロトウゾクカモメ・アジサシ・メボソムシクイなどがいた。



⑤ハイマツにとまるツメナガホオジロの雄

帰途は晴天の中、このキャンプ地から一気に州都のヘリポートまで400km近くを低空で飛び、途中人家一つ見当たらないカムチャツカの手つかずの大自然を眺めてきた。

以上、日本の本州・四国合わせた程の広さをもつカムチャツカで、繁殖期の鳥を垣間見たに過ぎないが、生息鳥類の殆どが夏鳥で、森林や草原の鳥相は日本より豊かではなかった。しかしその繁殖環境は手つかずの自然で、これからも改変されることなく、このまま保って欲しいと思ったものである。

朱鷺色の未来

亀田町 村上正志

多くのバーダーにとってニッポニアニッポンとはどういう存在なのでしょう。すでに野鳥では無くウオッチングの対象ではありませんが、日本産が消滅しようとし、中国産がそろそろ野生の姿を保っている今日、しばし佐渡の方に目を向けて見たいと思います。

そもそも何故、佐渡なのでしょう。徳川太平の時代、トキは日本各地に棲んでいました。しかし、明治に入り日本産の鳥獣に暗黒の時代がやって来ます。江戸時代の生き物を慈しむ心が明治維新と共に過去の価値観となり無慈悲に獲りつくされていった時代でした。数多くの鳥達は絶滅の危機にさらされ、その大半は滅んでいきました。その負の遺産を受け継いだ20世紀後半の日本人は今、世界の注目を集めています。

'99年のトキ人工繁殖の成功は様々な事を考えるきっかけを提供してくれたと思います。しかし、優優が誕生したのは日本にとって大事件でしたが何か手放しで喜べないのです。中国のトキ夫婦が中国のトキを生む。「日本生まれ」ですが中国のトキに変わりはないのです。純粋な日本のトキはもはや生まれようもありません。将来クローン技術で生まれたとなれば日本産復活という事になるのですが、それは少し道が違うように思います。キンちゃんは何十羽もいる保護センターはどんな光景でしょうか。大事なのは日本産トキの復活ではなく、日本人の自然を敬い愛する心の復活が重要なのではないのでしょうか。

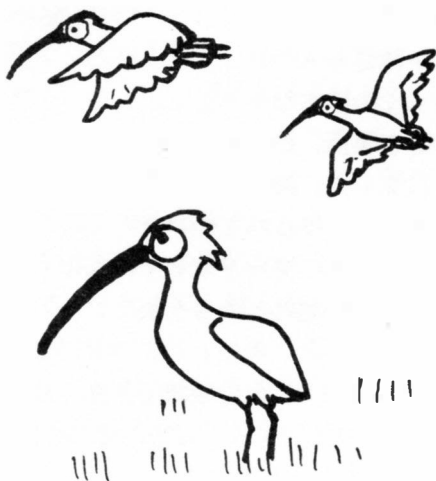
大正・昭和と時は流れ、ジバングは護美の島・カラス天国となり、中国大陸ではトキが100羽を越えました。この違いは何故でしょう。環境作りや鳥獣に対する考え方、接し方、保護の仕方等、国を上げての政策の意気込みの違いが感じられるのです。今後佐渡において農家の方々や林業を営む方々の協力を得て、

トキの棲息環境を整備していく事ができるでしょうか。かなり難しい問題を含んでいると思われまます。

生物の盛衰は自然の真理と考え、永い時間の流れの中では棲息の勢力図も過去において目まぐるしく変わってきたと思います。現在もハクセキレイが南西へ、あるいは高い山にまでエリアを拡大中ですし、オナガは北へ向かいつつあります。たった十数年でも勢力図は書き変わっていくのです。

不思議に思う事にサギ類の繁栄があります。トキと同じような棲息環境を好み、世界中に分布するサギの仲間はどうしてトキと別の道を歩んでいるのでしょうか。食物・繁殖・越冬等の違いが種の命運を分けたのでしょうか。

はたしてトキの未来は朝日に輝く朱鷺色の雲のように明るくなるのか、それとも佐渡に沈む夕日のように赤く燃えつきてしまうのか。それは日本人の自然や鳥獣保護に対する心の持ち方に掛かっていると思います。



上川村月山探鳥

新潟市 堀川大輔

野鳥の会の先輩、長谷川皓氏に誘われて総会に参加しました。遅刻して閉会のあいさつを聞いただけなので総会に出席したとはいえませんが、その後の夕食交流会、研修会、翌朝の探鳥会とたいへん楽しく有意義な催しでした。

研修会は、「お天気おじさん」の渡部通氏が、キバシリについて発表されました。まだ見たことも聞いたこともない鳥でしたが大いに興味をそそられました。キバシリは主に亜高山に生息し、全国でも4メッシュ(どのくらいのメッシュかは聞き漏らした)でしか繁殖が確認されていないという珍しい鳥とのことです。氏の調査では、樹幹にとけ込むような色で、人が近づくとジッと動かず、なかなか見つけにくい鳥だそうです。

しかも繁殖期が2月～3月、雪のある時期で一層人目に付きにくいのが案外人里近くにいるのではないかとのことでした。こんな地味な鳥を研究の対象にしている氏の努力におどろきを感じました。

探鳥会は、前夜の天気まつりの甲斐もなく、また不精進の人のせいとか時々雷鳴もどろくあいにくの雨になりました。しかし、さすがもの好き集団、悪天をもものともせず月山にでかけました。雨は全くにがての小生ですが皆さんの力に押されてついていくことになりました。雨具のフードをしては鳥の音が聞き取れないので濡れるのも覚悟でフードなしで後に続きました。後のトリアワセでは39種の出現でしたが、小生の確認できたのは19種でした。修行のたりなさを実感させられました。「ああ、おもしろかった！」



- ◎期 日：1999年(平成11年) 5月16日(日)
※天気：曇り時々雨、一時雷を伴う。昼頃から曇り。
◎場 所：東蒲原郡上川村月山
◎コース：1班 上川村太田一尾根沿いのコース
一月山一小山
2班 上川村小山一月山一小山

現地案内人 渡部 通
日本野鳥の会新潟県支部の総会、及び探鳥会へのご参加、どうもお疲れさまでした。あいにくの空模様でしたが、太田コースでは、すがすがしい大気の中、コルリのさえずりがとても印象的でした。

下山口となった小山付近では、澄んださえずりのノジコが感動的で、スギの枝に止まるサンバの姿が忘れられません。その他、ヨタカ、ホトトギス、トラツグミ、センダイムシクイ、オオルリ、キビタキ、イカルなど合計で39種の野鳥が確認されました。

秋季探鳥会(タカの渡り)に参加して

新潟市 南雲 静子

9月23日早朝、新潟市は昨夜来の雨が降り続いている。以前からタカの渡りを一度は見てみたいと楽しみにしていたのでとても残念だ。支部探鳥会案内の通知を再読すると「渡りには天候による当たりハズレが大きいですが運を味方に是非参加を」とある。運を味方にしようと思探鳥会に出かけることにした。長岡に近づくとつれて青い空がどんどん広がり探鳥地の小千谷市山本山山頂には10時到着、雲一つない快晴となった。山頂駐車場で車を降りると、展望台の方からどよめきが聞こえる。思わず空を見上げるとサシバが7羽位上空へ上空へと羽ばたきもせず舞上がって行く。

急いで展望台に駆け上がると、会員の方々が、タカ類の識別をしながら記録を取っておられた。こちらは朝から快晴で7時半頃からタカが出現しているとのことである。「山本山は336mの河岸段丘の山で9月～11月にかけて快晴の午前中には、この展望台からワシタカの姿を見ることが出来る。この展望台はバーダーには貴重な施設です。運が良ければ今日はイヌワシもみられますよ。」と会員の篠田さんが話してくれた。

展望台からの眺望はまさに絶景である。守門、浅草岳をはじめ越後三山から巻機の峰々へと続く綾線が青空にくっきりとそびえ立ち、黒姫、米山そして今走って来た高速道路の彼方には弥彦、角田まで姿を現している。360°の視界は鳥になったように爽快である。話を伺っている間にも次々と彼方の山々から湧きあがるように1羽2羽とタカが出現する。展望台上空を帆翔するサシバやハチクマの翼の横縞が光を通して息をのむ程の美しさである。「ハチクマが鳴いていますよ。」との末崎さんの声で上空を見上げると3羽の群の中の1羽が「パイヨ、パイヨー」と帆翔しながら鳴き続けている。その声は澄みきった空に遠く広がり

家族同志の絆を確認しているようにも聞こえた。柏崎方面の八石山頂上近くで10数羽のタカ柱が立っているのも確認することが出来た。

正午近く中山監事さんの鳥合わせで探鳥会は終了した。ワシタカ類は6種約400羽その他13種、参加者14名であった。遠くでアオアシギの口笛のような声が聞こえた。

終了後、誰も帰る気配がなく空を見上げていると、「出た、出た、鉄塔の方を見て！」と篠田さんの声、守門の方角から羽ばたきと滑翔を繰り返しながらイヌワシがどんどんこちらに近づいて来る。風切りと尾の基部の白さが青空に映える。翼をゆるやかにV字形にして鉄塔を通過した。望遠鏡で追いかけて妙高方面に点になって消えるまで見続けた。

中越地区のベテランの方々に教えて頂きながら上空に次々と出現するタカをじっくり観察できたことは、運を味方にした忘れられない探鳥会になった。加えてイヌワシの力強い羽ばたきは暫く私の脳裏から消えそうにもない。生命力溢れるワタリの鳥達をみて、自然と人間との共生について深く考えさせられた一日でもあった。



当日出たイヌワシ

インタビューコーナー

インタビューコーナーの2回目は、新潟市の山岸貴さんです。山岸さんは新潟に来られて8年目になる税理士さんで、末崎が自宅におじゃましてお話を伺いました。

末崎(以下M)：山岸さんのご出身はどちらでしょうか。

山岸(以下Y)：出身は長野県の小布施です。その後東京、千葉、埼玉にもいました。

M：野鳥を趣味として始められたきっかけは？

Y：最初のきっかけは写真なんですよね。千葉県の松戸に住んでいた時に、子供が生まれカメラを買って、子供の他に何を撮ろうかと思っていたら家の近くの木にコサギが止まっています。その頃は何かわからず、ツルだと言いながら写真を撮ろうとしました。それから鳥に興味をわき始めてきました。ただ鳥を撮るのは予想以上に大変で、ブラインドに入って撮影するようでないとなかなかいい写真は撮れないことがわかってきたら写真から鳥を見る方に興味が移ってきました。それから野鳥の会に入って10年以上になりますかね。

M：新潟の印象はどうか？

Y：やはり自然が豊かですね。埼玉にいた頃は自然が少ないので意識して探鳥会に参加するようにしていました。しかし、こちらに来てからはいつでも鳥が見られる感じで逆に鳥を見に行く回数が減りました。今こちらに住んでいると、車に乗っていてもハクチョウが見られますよね。あの頃は考えられもしませんでした。

M：好きな鳥とかありますか？

Y：なぜかわからないのですがフクロウ類が

好きです。豊栄の方でトラフズクを見つけて何年か通ったりもしました。また、糸魚川の高浪の池の近くでキャンプしていた時にはフクロウの声を聞いて、声を頼りに懐中電灯で照らしたら、たまたま見つけることができました。白っぽい鳥という印象が残っています。

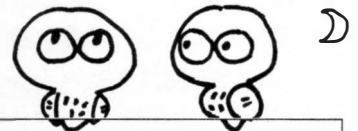
M：このところ何回か総会に子供さんといっしょに参加されていますが、子供さんの反応はどうですか？

Y：総会は普段行けないような遠い所でやっている子供といっしょに泊まりにいます。上の子は興味はあるみたいですが…。ただ親の立場としては、1年に1度でもよさをわかってもらいたくて参加しています。

M：支部や役員に対する要望はありますか？

Y：役員の皆さんもボランティアなわけだし、あまり期待しすぎてはいけないと思います。私は情報として「野鳥」誌や支部報を見ているわけではなく、どこかでつながりを持ってたくて野鳥の会に入っています。新潟県は広く、集まるだけでも大変だろうと思うばかりで、役員の方に特に要望はありません。

M：本日はどうもありがとうございました。



発行 1999年10月30日 No.48

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

TEL 025-229-2018 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002